

## 子どもや孫たちが「原発安心神話」にさらされています

### —広げよう「小・中・高『放射線副読本』の使用やめて」の声

望田 幸男

昨年10月、文部科学省は、それまでの『原子力発電』副読本に替えて、新たに小・中・高の生徒それぞれに向けて『放射線副読本』を作成し、京都においてもすでに生徒たちに配布されています。これに対して、京教組、子どもを守る会、新婦人の会、自治労連、府職労、市職労などが参加する「子どもと教育・文化を守る府民会議」は、本年3月15日に京都府教育委員会に、これらの副読本を各学校で使用しないように指導・助言するように申し入れました。この府民会議の申し入れについては、同日付けの朝日新聞や毎日新聞でも報じられ、関心の広がりが見られます。

だが、他方で反原発や再稼働反対のデモや集会の大きな渦にくらべれば、子どもや孫たちが、学校で原発や放射能について、どんな授業や教育をうけているかについては、私たちの関心は低いといわざるをえません。私たちの運動は、子どもや孫たちに引き継がれていかなければ、「原発のない日本」の実現は「からめ手」から崩されてしまいます。この意味で小・中・高の生徒たちに配布され教材とされている『放射線副読本』を、まず私たち自身がひも解いてみなければなりません。

#### 「放射線副読本」の問題点

これらの副読本は、小学校用、中学校用、高校用とそれぞれつくられていますが、その問題点をいくつか示せば、以下のようです。

- (1) 福島原発の重大事故の実態、地震と津波の具体的影響などをまったく述べていません。文章的にも「危険」や「被害」の文字は避け、「影響」という文字が多用されています。
- (2) 放射線を身近に感じさせ、不安をいだかせないようにしています(小学校解説編 p. 3の指導上の留意点)。これは中学校用(p. 4)にも見られる点ですが、レントゲン写真などを事例にして「日常生活でも放射線を受けています」と、説明するやり方をしています。
- (3) 広島・長崎の原爆についても、小学校の場合には、大量の死者をふくむ被害のすさまじさについてはまったく語っていません。中学校用では、原爆のことをいっさい述べていません。高校用では、被ばくによって「遺伝的影響が人に現れたとする証拠は、これまでのところ報告されていません。」と述べています。
- (4) 空気やほこりや食品をつうじて放射性物質を取り込む、いわゆる内部被ばくが、たいへん危険なことであることについて、まったく明らかにしていません。高校解説編 p. 13では「100 ミリシーベルト以下の低い線量と病気との関係については、明確な証拠はないことを理解できるようにする」と記されています。
- (5) 高校用p. 20には「リスクを完全に無くしてベネフィット(便益)だけを得ることは不可能です」と述べ(cf. 小学校解説編 p. 20、中学解説編 p. 21)、この論理が医療だけでなく放射線一般に拡大されています。

(いっそう具体的な問題点の指摘は、京都教育センター編集『原発・放射線をどう教えるか』の第二章Iを参照して下さい。)